

SPECIAL TALK SESSION

第3回目を迎え、ますますパワーアップする栄ミナミ音楽祭。影の立役者たちは一体どんな仕掛けを企んでいるのか？音楽祭でのスペシャルゲストでもあるJAYWALK・中村耕一氏を交え、今回のプロジェクトの全貌に迫った。



▶ 面白い街には面白い人が集まる。そんな連鎖反応が起こる街に (藤井)

桑原 名古屋は経済と交通の要所として名古屋駅という中心地があり、それとは別にブランド、ファッション、飲食、カルチャーの発信地としての栄がある。“栄ミナミ”という地名はないんですが、6.7年前に地元情報誌「KELLY」が栄ミナミ地区の特集を組んだ。それを発端に「栄ミナミ文化フォーラム」という勉強会が生まれ、その一貫で「音楽祭をやるよ」ということになったわけです。

中村 もう今年で3回目なんですね。昨年、僕は前夜祭に行かせていただきましたが、レコード会社の宣伝マンたちがすごい集まっています。緊張してライブがやりづらかったですね(笑)。

桑原 前夜祭は毎年4時から地元の町内会の人を集め、7時からマスコミヤスポンサー各社を呼んで合計2回やるんです。栄の真ん中で繁華街の割に人が住んでいて。高齢の方も多

いですが一昨年は町内から80人ぐらい集まりました。一つの音楽イベントが確実に地元と繋がったことが嬉しかったですね。

深田 それがきっかけで「毎月街を掃除しよう」とか、住民もボランティアに参加し始めたんです。コミュニティができてくるとそれを警察や土木事務所といった行政が応援してくれる。音楽祭を通じ、実行委員会も住民も飲食店などの経営者もみんな一緒に参加して非常に楽しい。いいきっかけをいただいたと感謝しています。

藤井 コンセプトは「栄ミナミを面白い街に」。面白い街には面白い人が集まる。事務所を構え、取引先が集まり、オシャレな店にオシャレな人が集まる…そんな連鎖が起こる街にしたい。そうすれば街の興行きも広がりももっと出てくるはず。



堂ではジャズをやります。

藤井 ジャズやクラシックは小屋の中でしか出来ない音楽に近い。でも街の音楽祭っていうのは、出来るだけ外でやって誰でも気軽に音楽を聴けることが醍醐味。

中村 街とミュージシャンとが一体となるライブ感のような。

桑原 歩いているとどんだん音が近づいて来る感じ。あのワクワク感が好きですね。

藤井 昨年は初日が雨で。

深田 傘をさしながら足を止めてくれるんだよね、楽しかったね。

桑原 音楽祭では十数カ所で路上ライブをやっているんですが、そこ仕切ってる所に東京から参加するインディーズミュージシャンから朝イチで電話が入った。「僕行きますよ。雨でも負けずに唄います」と。嬉しかったですねえ。

中村 音楽やる人ってそうなんですね。雨なら雨でやるし、状況とかキャンセルとか全然聞かない。やる側はお客さんが集まれば唄うというのがスタンダードですから。音楽祭の二日間は栄のあちこちから音楽が聞こえてくる訳ですね。

▶ 3年も続ければ、音楽祭は名古屋の大きな名物になる (深田)

深田 名古屋は閉鎖的な所があり、この辺りも外から来た人を受け入れる土壌が少なかった。ところが3年前の音楽祭をきっかけに、どんどん変化が起こった。うちのような老舗も“音楽”というお遊びがきっかけだったから入りやすかったのですね。街作りなんて難しく考えず「面白い人は楽しいんだ」と素直に受け入れた。

中村 音楽が人と人とを繋いだ。“絆”ですね。

桑原 街を舞台に横の絆は地域、縦の絆は時間なんです。時間=世代で。おじいちゃんとか孫、先輩と後輩…そういったものを縦軸にそれを繋ぐ間の接着剤が音楽というエンタテインメント。例えばJAYWALKがライブをやるとJAYWALKのファンが集まるように、縁もゆかりもない人たちが同じ時間と夢を共有するんです。

中村 この音楽祭ってジャンルを問わないんですね。それも凄い。

桑原 今年はカラオケ選手権もやるんです。アートビオールの800人ほど入る場所で、おじいちゃん、おばあちゃんを始め一般の人を集めて。音楽祭とイメージが合うか迷ったんですが、音楽に偏見を持ちやいふかと。かたや神社の境内にある能楽

桑原 昨年からFM3局、AM2局の計5局の番組にイベントプロデューサーをお願いして。普通あり得ないんですが、今年も全局やってくれます。さらに今年は藤井さんと一緒に東海テレビにお願いして、地域ワンセグを実現します。

藤井 矢場公園に仮設スタジオを、ナディアパークに電波場を作り、ワンセグ携帯にお店の情報や20数ヶ所ある会場のライブ映像をどんだん中継できるんです。

中村 それは画期的ですね。携帯からも生ライブが聞こえてくる。

桑原 地元で頑張っているアーティストと、東京で活躍するJAYWALKのようなキャリアのあるアーティストが同じステージに立つことでコミュニケーションが生まれる。そこに地元の町内会の人たちが参加するとさらに説得力が増す。

藤井 すぐ近くにNCAという、音楽やアート系の専門学校があります。その学校は毎年大勢の生徒をボランティアに出してくれるんです。それが今年はボランティアを含め、音楽祭に参

加すること自体がカリキュラムに組み込まれた。

中村 実践できるなんてありそうで無い。音楽祭が良い体験になりますね。

桑原 教える先生がプロのミキサーで、ジャズのイベントでは先生と生徒が機材の搬入から組み立て、ミキシングまですべて無償でやってくれるんです。

深田 祭りの後、学生と地元のおじいさんたちが一緒に寺の掃除をやったりとかね。他の祭りも若い人が神輿を担ぐ。住民かどうかなんて関係なく、みんな楽しんでますからね。

藤井 そういう意味では入り口が音楽というのが分かりやすいし、誰でも参加しやすいですね。



▶ “音楽文化の地産地消”的に、地元の連中の何かのきっかけ作りに (深田)

深田 ミュージシャンの地産地消とよく彼(桑原)は言うけど、地元の人との何かのきっかけづくりになればね。

桑原 “音楽文化の地産地消”。最終的には名古屋のアーティストを名古屋のメディアを使って名古屋の人に紹介して、そこに市場ができること。

藤井 それも人と人のつながりですね。地元住民やスタッフだけでなく、ボランティアもどんだん参加していたいたっているのは、やはり皆さんがこの栄が好きで、街を大事にしているからこそ。

深田 それ为荣ミナミ音楽祭。企画する人も参加する人も見る人も、みんな好きでやっている人ばかり。それが良い。強制的なものとは違うから。

中村 栄ミナミはあったかい人が集まる街なんですね。ところで音楽祭の参加ゲストって、何か必要な参加資格があるんですか？

桑原 アマチュアは公募しオーディション審査をします。今のところストリートが中心で、上手いアーティストはバルコ前とかに配りたいですね。他の参加者が「早くあのステージに上がりたい」という目標を抱いて翌年に繋げるような。

中村 ストリートパフォーマンスって、スリルがあって勉強になります。

桑原 お客さんを集めてからやるコンサートとは違い、路上は全く関係ない場所で唄うわけですから。JAYWALKもストリートをやったっていうのは驚きました。

中村 僕らの意志があったからで。でもそれまではストリートで簡単にできるつもりでいたんですよ。ギター1本あればいつでもできると。できやしないですね。コンサートに来てくれる人たちは僕らに対し好意的な思いをどこか持ってくれている。僕らはそれにどこか甘えている訳で。でもストリートではほとんどそれが無い。だから立ち止まって聴いてくれること自体、ありがたいですね。昨年の音楽祭は、まあストリートに近いっちゃ近かったんですけどね(笑)。

桑原 今年はワンセグあり、カラオケあり、で新たな取り組みもたくさんあります。是非皆さん、楽しみにしてください。音楽祭を通じ、栄ミナミの歴史と文化も知っていたければさらに嬉しいですね。

対談の場所 ■ 割烹・ふぐ料理 みどり

名古屋市中区栄3-14-29 Tel 052-241-0162

プロフィール

中村耕一 / デビュー29年目を迎える「JAYWALK」のヴォーカリスト。「何もいなくて…夏」はaround30世代の名曲。3/25にシングル「ここから、すべてが」を、4/22には2年ぶりとなるアルバム「stories」をリリース。5/7~コンサートツアーがスタートする。

深田正雄 / 栄ミナミ地域活性化協議会会長。栄ミナミに96年続く老舗料亭「萬茂」に生まれ、尾張の歴史・文化に精通し、地域の活性化や環境改善活動にも力を注ぐ。

桑原宏司 / アーティストの発掘、育成からイベント企画運営まで、名古屋の音楽シーンを創り上げてきた、チケットびあ名古屋(株)代表取締役社長

藤井一彦 / (株)アイ・アンド・キュー アドバイジング代表取締役。大津通商店街理事長を務め、地域の活性化と繁栄に務める。「栄ミナミ音楽祭」の発起人

